

上野征夫 著

書 評

内科医のためのリウマチ・膠原病診療ビジュアルテキスト

七川 欽次(滋賀医科大学名誉教授)

本書は、わが国のリウマチ学の歴史のなかで画期的なもので、夥しいリウマチ性疾患患者に接する医師が、どのように診療を進めればよいかの指針を、率直に、クリアカットに、しかもていねいに、リウマチ病全般にわたって述べている。これまでの長い経験から、これだけは知っておいて診療に生かしてほしいという著者の想いが伝わってくる。どの病気の記述も、患者を目の前にした真剣な目差しが感じられ、なおかつビジュアルで、カラー写真やX線写真、手技の図が豊富である。きわめてわかりやすい、しかしながら経験に裏打ちされた簡単な記載にも深い味わいがあり、さすがと思わせる。従来のリウマチのテキストブックと比べるとその違いは一目瞭然で、診断基準に長々と頁を費やし、多くの先達の過去の意見が述べられても著者自身の顔が見えてこない、といったものではない。そのうえ、たいていのテキストブックは編集本であるから、なおさらこの本との違いが際立っている。

本書は、リウマチ患者を診療するにはこの程度の知識と手技を身につけていなければならない、ということを示そうとしているように見える。したがって、目次の配列も、多い症状、多い患者の順から述べられていて、まず関節炎の鑑別の記載から始まり、臨床検査のなかでも、X線写真の読み方、オーダーの仕方、関節液からの疾患の鑑別に多くの頁を費している。これは著者が比重の置き方を心得ているからで、私にとっては心憎い思いである。次いで関節の見方から問診のとり方などとともに、眼や皮膚の症状がカラフルに示されている。さらに筋肉の痛みの診断、関節穿刺の手技について述べ、治療薬剤にどのようなものがあるか、その用い方と副作用が説明してある。

疾患の記載も、まず局所的疼痛性疾患から始まるのは、日常遭遇する患者の数を考慮したものであろう。次いでRA、OAとなり、結晶誘発性関節症、線維筋痛症、骨粗鬆症、結節性紅斑、最後に全身性炎症性結合組織病が記載されていて、リウマチ患者を扱う臨床医にとってはなるほどと思わせる配置である。

考えてみれば、このような200頁余りの分厚くない、しかし重厚なリウマチのテキストブックは、わが国では余人には書けないだろう。著者は米国に長くいて、この国の専門医のタイトルをもつ、わが国唯一の内科医であって、私は彼と一緒に10年近く働いたが、すぐれたリウマチ専門医がどのようなものであるか、その知識と経験と技術とに感銘を受けた。このような本はもっと早く出ていなければならないのに、やっと上梓されるに到ったのは、わが国のリウマチ学のレベルが国際的なものに近づいてきたことを示していると思われるが、このテキストブックの題名に「リウマチ・膠原病診療」と、「膠原病」という著者も述べているように、他の国では使われなくなった言葉を加えないと「リウマチ」にならないわが国特有の事情を示していて、著者にとって不本意なところがあるだろう。

表題が「内科医のための」となっているが、これは関節炎患者の診療に日常携わっている整形外科医にもぜひ読んでもらいたいものであり、総じて、痛みを訴える患者に接する医師すべてに、座右の書として勧めたい。このような本を出版した上野先生に私は讃辞を惜しまない。

(B5判 244頁 定価(本体6,800円+税))
2002年 医学書院 刊